

付、同廿日御觸有之、

〔武江年表〕^五延享四年十月上旬より、諸國風邪流行。

〔蜘蛛の絲卷追加〕風邪流行。

不圖思ひ出づる儘、むかしをまのびて記すは、寛政三四年の頃にやありけん、江戸中風邪流行して病ざる家なし、市中商人の家など戸さして、家内風邪に付相休申候と、札を張りたる家所々に見えたり、殿中伺候の面々、供立減少、長髪不苦と云ふ令を出だす程なり、此比街歌に、そんれはおそろきお世話へと云ふ童謡はやりし故、此風邪をお世話風と云へり、其翌春、京傳作、草ざうしの新板に、此頃は上下一部紙員十枚なりおせはと云ふはやり女郎、深川にありて、客床に入れば、團扇を以てあふぐ、客たちまち襟元ぞつとして風をひき熱に犯され、様々の事をなす趣向なり、大に世に行はれ、予も幼年所持せり、是も六十年のむかしとなりぬ、

〔半日閑話〕^{十二}明和三年三月初つかたより疫風大に行はる、道中雲助并火消屋敷抱之齋、ことごとく死す、名付て雲助風と云、

〔天保集成絲綸錄〕^{百六}享和二戊年三月

一風邪流行に付、長髪に而罷出候儀、并供減候而召連候儀不苦候、今日罷出居候もの、風邪之者は勝手次第罷歸候様、伊豆守殿被仰渡候段、神保佐渡守申聞候、

享和二戊年三月

御目付江

此節病人多候付、御番衆其外に而も例と違、詰切身分弁當之面々は、此砌は御臺所給させ可申候、但西丸も同斷

享和二戊年三月